



明るくて雲も浮んでみたき春

きらきらを吊るす聖樹の緑色

色白に生れて春の雲うかぶ

蜜柑まだ剥けぬ幼なと思ひしが

山吹の一畳余り縦に咲かせ

橋長し海の夕焼を見つつゆく

ふるさとの小さき展望台の夏

長き夜の机に落る髪の毛の影

火口湖の水脈深く夜の長し

パトカーは白黒に金秋の風

麓から見えぬ火口湖天の川

墨を得て筆ふくらむや豊の秋

緑黄色野菜摂るべし南瓜食ふ

懐に後生大事の紙懐炉

2022・3・27【壇2022年5句】

2

選18句

17行3段組14ポ 2022年8月27日 17:26へ1<桐9

明るくて雲も浮んでみたき春

~~緑黄色~~野菜摂るべし南瓜食ふ

橋長し海の夕焼を見つつゆく

音もなく氷るものあり闇の中

パトカーは白黒に金秋の風

氷柱とはなれず悲しき水たまり

墨を得て筆ふくらむや豊の秋

懐に後生大事の紙懐炉

~~墨を得て~~膨らむ筆や豊の秋

きらきらを吊るす聖樹の緑色淨色

白髪の長身瘦軀初夏の街

蜜柑まだ剥けぬ幼なと思ひしが

涼しさに住んでもみたき土星の輪

会議室一人で使ふ涼しさよ

夏瘦の自画像を描く鏡かな

~~チエス~~ならば紅茶なれども新茶の夜

ふるさとの小さき展望台の夏

麓から見えぬ火口湖天の川

3 軽くランAを先行させてみる。9/3

明るくて雲も浮んでみたき春

麓から見えぬ火口湖天の川

涼しさに住んでもみたき土星の輪

墨を得て筆ふくらむや豊の秋

会議室一人で使ふ涼しさよ

秋草挿すリュックの人とすれ違ふ

ふるさとの小さき展望台の夏

音もなく氷るものあり闇の中

白髪の長身瘦軀初夏の街

氷柱とはなれず悲しき水たまり

橋長し夕焼の海を見つつゆく

懐に後生大事の紙懐炉

夏瘦の自画像を描く鏡かな

きらきらを吊るす聖樹の緑色

縁側を素足すずしく歩くなり

蜜柑まだ剥けぬ幼なと思ひしが

白と銀を貼り合せたる日傘なり

牛乳を飲んで夜店に出かけたる

帽の頭のますます小さきプールかな

パトカーは白黒に金秋の風

夏の果て秋の初めの 8.30
秋草をさして 9.1
パトカーのやうに 9.1
秋草をさして 9.1
タテ幅のドーナツに 9.1
秋草をさして 9.1
人よ 9.1
女 9.1
かっこよく 9.1
かっこよく 9.1

4 ↓ tw 拙稿 At 4枚目

明るくて雲も浮んでみたき春

天守閣みあげし我に揚羽蝶

涼しさに住んでもみたき土星の輪

火口湖の水脈深く夜の長し

会議室一人で使ふ涼しさよ

パトカーは白黒に金秋の風

ふるさとの小さき展望台の夏

麓から見えぬ火口湖天の川

白髪 of 長身瘦軀初夏の街

秋草をリュックに挿していい女

夏果 of 青空に見し雲と月

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

橋長し夕焼の海を見つつゆく

音もなく氷るものあり闇の中

夏瘦 of 自画像を描く鏡かな

校庭の氷は銀に砕かれて

縁側を素足すずしく歩くなり

氷柱にはなれず平らに氷る水

黒と銀をを貼り合せたる日傘なり

懐に後生大事の紙懐炉

牛乳を飲んで夜店に行くところ

きらきらを吊るす聖樹の緑色

子の髪 of 帽に隠るるプールかな

① 水泳帽に隠れたる 9.13
② 王に誘われ込んで
③ やく なまこらんで

水の圧力

高き深さや

明るくて雲も浮んでみたき春

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

涼しさに住んでもみたき土星の輪

氷柱にはなれず平らに氷る水

ふるさとの小さき展望台の夏

懐に後生大事の紙懐炉

白髪 of 長身瘦軀初夏の街

きらきらを吊るす聖樹の緑色

橋長し夕焼の海を見つつゆく

夏瘦の自画像を描く鏡かな

黒と銀を貼り合せたる日傘なり

牛乳を飲んで夜店に行くところ

子の髪が水泳帽に膨らんで

天守閣みあげし我に揚羽蝶

パトカーは白黒に金秋の風

秋草をリュックに挿している女

2022・9・13 俳壇賞2022 全130句 選20句

6

麗かやトントン叩く赤子の背 パトカーは白黒に金秋の風

明るくて雲も浮んでみたき春 揚花火惜気もなく哀れなり

森の字に木の字の小さし蟻出づる 巻き上げて埃の見ゆる秋簾

涼しさに住んでもみたき土星の輪 秋草をリュックに挿していい女

ふるさとの小さき展望台の夏 墨を得て筆ふくらむや稲穂波

白髪の長身瘦軀初夏の街 氷柱にはなれず平らに氷る水

橋長し夕焼の海を見つつゆく 懐に後生大事の紙懐炉

夏瘦の自画像を描く鏡かな きらきらを吊るす聖樹の緑色

黒と銀を貼り合せたる日傘なり

牛乳を飲んで夜店に行くところ

子の髪が水泳帽に膨らんで

天守閣みあげし我に揚羽蝶

惜みなくおたのしみ
まわかな
9.14

秋の簾の響かな
9.14

膨らんで
9.14

7

明るくて雲も浮んでみたき春

麗かやトントン叩く赤子の背

森の字に木の字の小さし蟻穴を

白髪の長身瘦軀初夏の街

ふるさとの小さき展望台の夏

涼しさに住んでもみたき土星の輪

黒と銀を貼り合せたる日傘なり

子の髪を水泳帽に押し込んで

天守閣みあげし我に揚羽蝶

夏瘦の自画像を描く鏡かな

橋長し夕焼の海を見つつゆく

牛乳を飲んで夜店に行くところ

惜気なく花火のあがる哀れかな

パトカーは白黒に金秋の風

秋草をリュックに挿している女

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

巻き上げて秋の簾の埃かな

懐に後生大事の紙懐炉

氷柱にはなれず平らに氷る水

湯婆は小判のかたち暖かし

軋みつつ闇夜の氷る力かな

きらきらを吊るす聖樹の緑色

たしあや

秋草をリュックに挿している女
リュックに入れて
花火をまき

背のリュックに挿す女

秋草をまきつけて挿したる
一本のくもを挿す

一本のくもを挿す

考を待つお玉お子や

玉お子の

考を待し一糸端の葉の子

2022・6・15 俳壇賞2022 全156句

選22句

明るくて雲も浮んでみたき春

惜気なく花火のあがる哀れかな

麗かやトントン叩く赤子の背

パトカーは白黒に金秋の風

白髪王の長身瘦軀初夏の街

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

ふるさとの小さき展望台の夏

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

涼しさに住んでもみたき土星の輪

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

黒と銀を貼り合せたる日傘なり

氷柱にはなれず平らに氷る水

黒髪を水泳帽に匿の中ひて

湯婆は小判のかたち暖かし

夏瘦の自画像を描く鏡かな

軋みつつ闇夜の氷る力かな

餌を得し一番端の燕の子

きらきらを吊るす聖樹の緑色

森の字に木の字の小さし蟻の穴

春を待つお玉杓子や五線譜の

橋長し夕焼の海を見つつゆく

五線譜に春待つお玉杓子かな

牛乳を飲んで夜店に行くところ

お玉杓子かな

明るくて雲も浮んでみたき春 牛乳を飲んで夜店に行くところ

麗かやトントン叩く赤子の背 絶え間なく花火のあがる哀れかな

五線紙のお玉杓子の春の歌 パトカーは白黒に金秋の風

白髪 of 長身瘦軀初夏の街 秋草をリュックに挿して花舗を出づ

ふるさとの小さき展望台の夏 巻き上げて秋の簾の埃みゆ

涼しさに住んでもみたき土星の輪 墨を得て筆ふくらむや稲穂波

黒と銀を貼り合せたる日傘なり 氷柱にはなれず平らに氷る水

黒髪を水泳帽の中になかな 湯婆は小判のかたち暖かし

夏瘦の自画像を描く鏡かな 軋みつつ闇夜の氷る力かな

餌を得し一番端の燕の子 きらきらを吊るす聖樹の緑色

森の字に木の字の小さし蟻の列

橋長し夕焼の海を見つつゆく

10

明るくて雲も浮んでみたき春

森の字に木の字の小さし蟻の列

氷柱にはなれず平らに氷る水

麗かやトントン叩く赤子の背

橋長し夕焼の海を見つつゆく

湯婆は小判のかたち暖かし

五線紙のお玉杓子の春の歌

牛乳を飲んで夜店に行くところ

軋みつつ闇夜の氷る力かな

白髪 of 長身瘦軀初夏の街

絶え間なく花火のあがる哀れかな

きらきらを吊るす聖樹の緑色

ふるさとの小さき展望台の夏

パトカーは白黒に金秋の風

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

涼しさに住んでもみたき土星の輪

秋風や虫の骸の少し崩れ

松過の雨の温水プールかな

弓張に黒と銀なる日傘かな

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

子の髪を水泳帽の中に詰む

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

夏瘦の自画像を描く鏡かな

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

餌を得し一番端の燕の子

冬帝はお年を召してをらざるや



古き仏に古き埃や御開帳

橋長し夕焼の海を見つつゆく

軋みつつ闇夜の氷る力かな

明るくて雲も浮んでみたき春

牛乳を飲んで夜店に行くところ

きらきらを吊るす聖樹の緑色

麗かやトントン叩く赤子の背

絶え間なく花火のあがる哀れかな

雪国は雪を敷き詰め初苗

五線紙のお玉杓子の春の歌

パトカーは白黒に金秋の風

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

白髪の長身瘦軀初夏の街

秋風や虫の骸の少し崩れ

大根も牛蒡もありて注連飾

ふるさとの小さき展望台の夏

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

涼しさに住んでもみたき土星の輪

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

松過の雨の温水プールかな

弓張張りほめてに黒と銀なる日傘かな

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

雪の字の雷の字に似てお書初

子の髪を水泳帽の中に詰む

威し銃死者死者さかにかんじ銃鳴り響くに別れを告げるべく

帰り道いそいそ急ぐ福袋

夏瘦の自画像を描く鏡かな

冬帝はお年を召してをらざるや

初鏡一寸眼鏡を外し見る

餌を得し一番端の燕の子

氷柱にはなれず平らに氷る水

十六輛編成樂て行くし旅始

森の字に木の字の小さし蟻の列

湯婆は小判のかたち暖かし

太箸を読めず使へず赤ん坊

2022・9・22 俳壇賞2022 全220句 選30句

古き仏に古き埃や御開帳 絶え間なく花火のあがる哀れかな

明るくて雲も浮んでみたき春 パトカーは白黒に金秋の風

麗かやトントン叩く赤子の背 秋風や虫の骸の少し崩れ

五線紙のお玉杓子の春の歌 巻き上げて秋の簾の埃みゆ

ふるさとの小さき展望台の夏 秋草をリュックに挿して花舗を出づ

涼しさに住んでもみたき土星の輪 墨を得て筆ふくらむや稲穂波

子の髪を水泳帽の中に詰む 冬帝はお年を召してをらざるや

夏瘦の自画像を描く鏡かな 水は雪に水は氷に冬紅葉

餌を得し一番端の燕の子 氷柱にはなれず平らに氷る水

森の字に木の字の小さし蟻の列 湯婆は小判のかたち暖かし

橋長し夕焼の海を見つつゆく きらきらを吊るす聖樹の緑色

牛乳を飲んで夜店に行くところ 雪国は雪を敷き詰め初苗

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

大根も牛蒡もありて注連飾

太箸やどかどか置かれし赤ん坊

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

十六輛編成でこそ旅始

松過の雨の温水プールかな

12行3段組14ポ 2022年9月22日 10:43 桐10

夏瘦の自画像を描く鏡かな
水は雪に水は氷に冬紅葉
餌を得し一番端の燕の子
森の字に木の字の小さし蟻の列
橋長し夕焼の海を見つつゆく
牛乳を飲んで夜店に行くところ

舞ひ初めし埃の綺羅も御開帳

牛乳を飲んで夜店に行くところ

きらきらを吊るす聖樹の緑色

明るくて雲も浮んでみたき春

絶え間なく花火のあがる哀れかな

雪国は雪を敷き詰め初苗

麗かやトントン叩く赤子の背

懐に小判たんまり星祭

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

五線紙のお玉杓子の春の歌

パトカーは白黒に金秋の風

若水や雪と氷を打ち開き

温泉の町にネオンのゲート春の宵

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

大根も牛蒡もありて注連飾

森の字に木の字の小さし蟻の列

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

太箸やどかと置かれし赤ん坊

ふるさとの小さき展望台の夏

虫籠の鳴かず跳ばずとなりけり

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

涼しさに住んでもみたき土星の輪

秋風に虫の骸の欠片かな

かつかつと行く初旅のハイヒール

帽子また小さくなりし夏休

冬帝はお年を召してをらざるや

松過の雨の温水プールかな

子の髪を水泳帽の中に詰む

水は雪に水は氷に冬紅葉

初夜を行く

夏瘦の自画像を描く鏡かな

氷柱にはなれず平らに氷る水

橋長し夕焼の海を見つつゆく

湯婆は小判のかたち暖かし

14

明るくて雲も浮んでみたき春

パトカーは白黒に金秋の風

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

舞ひ初めし埃の綺羅も御開帳

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

かつかつと行け初旅のハイヒール

麗かやトントン叩く赤子の背

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

松過の雨の温水プールかな

五線紙のお玉杓子の春の歌

冬帝はお年を召してをらざるや

森の字に木の字の小さし蟻の列

氷柱にはなれず平らに氷る水

ふるさとの小さき展望台の夏

湯婆は小判のかたち暖かし

涼しさに住んでもみたき土星の輪

きらきらを吊るす聖樹の緑色

子の髪を水泳帽の中に詰む

雪国は雪を敷き詰め初茜

夏瘦の自画像を描く鏡かな

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

橋長し夕焼の海を見つつゆく

若水や雪と氷を打ち開き

牛乳を飲んで夜店に行くところ

大根も牛蒡もありて注連飾

絶え間なく花火のあがる哀れかな

太箸やどかと置かれし赤ん坊

紙吹雪もみ雪の中に暖かし

女初旅ハイヒール

2022・6・22 俳壇賞2022 全249句

15

30/253

↓ 30/152

162

選30句

B

134

明るくて雲も浮んでみたき春

牛乳を飲んで夜店に行くところ

温泉の宿の二階に泊つる去年今年

舞ひ初めし埃の綺羅も御開帳

絶え間なく花火のあがる哀れかな

大根も牛蒡もありて注連飾

麗かやトントン叩く赤子の背

パトカーは白黒に金秋の風

太箸やどかと置かれし赤ん坊

五線紙のお玉杓子の春の歌

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

森の字に木の字の小さし蟻の列

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

かつかつと女初旅ハイヒール

ふるさとの小さき展望台の夏

冬帝はお年を召してをらざるや

松過の雨の温水プールかな

天守閣よりひとひらの揚羽蝶

氷柱にはなれず平らに氷る水

突つ張つて黒と銀なる日傘なり

湯婆は小判のかたち暖かし

涼しさに住んでもみたき土星の輪

きらきらを吊るす聖樹の緑色

子の髪を水泳帽の中に詰む

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

夏瘦の自画像を描く鏡かな

雪国は雪を敷き詰め初苗

橋長し夕焼の海を見つつゆく

若水や雪と氷を打ち開き

12行3段組14ポ 2022年9月22日 22:57へ1 桐10

明るくて雲も浮んでみたき春

牛乳を飲んで夜店に行くところ

湯の宿の二階に泊つる去年今年

舞ひ初めし埃の綺羅も御開帳

絶え間なく花火のあがる哀れかな

大根も牛蒡もありて注連飾

麗かやトントン叩く赤子の背

パトカーは白黒に金秋の風

太箸やどかと置かれし赤ん坊

五線紙のお玉杓子が歌ふ春

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

森の字に木の字の小さし蟻の列

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

かつかつと女初旅ハイヒール

ふるさとの小さき展望台の夏

冬帝はお年を召しておはすやも

松過の雨の温水プールかな

天守閣よりひとひらの揚羽蝶

氷柱にはなれず平らに氷る水

突つ張つて黒と銀なる日傘なり

湯婆は小判のかたち暖かし

涼しさに住んでもみたき土星の輪

きらきらを吊るす聖樹の緑色

子の髪を水泳帽の中に詰む

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

夏瘦の自画像を描く鏡かな

雪国は雪を敷き詰め初茜

橋長し夕焼の海を見つつゆく

若水や雪と氷を打ち開き

きらきらを吊るす 9.24

草むらうてり 挿して 9.24

虫さしや



明るくて雲も浮んでみたき春

橋長し夕焼の海を見つつゆく

湯の宿の二階に泊つる去年今年

きらきらと古き埃も御開帳

牛乳を飲んで夜店に行くところ

大根も牛蒡もありて注連飾

麗かやトントン叩く赤子の背

絶え間なく花火のあがる哀れかな

太箸やどかと置かれし赤ん坊

五線紙のお玉杓子が歌ふ春

パトカーは白黒に金秋の風

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

初夏に行く白髪頭の婆二人

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

かつかつと女初旅ハイヒール

ふるさとの小さき展望台の夏

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

松過の雨の温水プールかな

天守閣よりひとひらの揚羽蝶

冬帝はお年を召して気難し

裏地には黒を誂へ銀日傘

氷柱にはなれず平らに氷る水

子の髪を水泳帽の中に詰む

湯婆は小判のかたち暖かし

涼しさに住んでもみたき土星の輪

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

夏瘦の自画像を描く鏡かな

雪国は雪を敷き詰め初茜

森の字に木の字の小さし蟻の列

若水や雪と氷を打ち開き



明るくて雲も浮んでみたき春

橋長し夕焼の海を見つつゆく

湯の宿の二階に泊つる去年今年

きらきらと古き埃も御開帳

牛乳を飲んで夜店に行くところ

大根も牛蒡もありて注連飾

麗かやトントン叩く赤子の背

絶え間なく花火のあがる哀れかな

太箸やどかと置かれし赤ん坊

五線紙のお玉杓子が歌ふ春

パトカーは白黒に金秋の風

羽子突に梯子持ち出す騒ぎかな

初夏に行く白髪頭の婆二人

秋草をリュックに挿して花舗を出づ

かつかつと女初旅ハイヒール

ふるさとの小さき展望台の夏

墨を得て筆ふくらむや稲穂波

松過の雨の温水プールへと

天守閣よりひとひらの揚羽蝶

冬帝はお年を召して気難し

詠へし裏地の黒や銀日傘

氷柱にはなれず平らに氷る水

子の髪を水泳帽の中に詰む

湯婆は小判のかたち暖かし

涼しさに住んでもみたき土星の輪

紙吹雪ふらせてみたき初日の出

夏瘦の自画像を描く鏡かな

雪国は雪を敷き詰め初苗

森の字に木の字の小さし蟻の列

若水や雪と氷を打ち開き